



「あまおう」3月の管理

南筑後普及指導センター

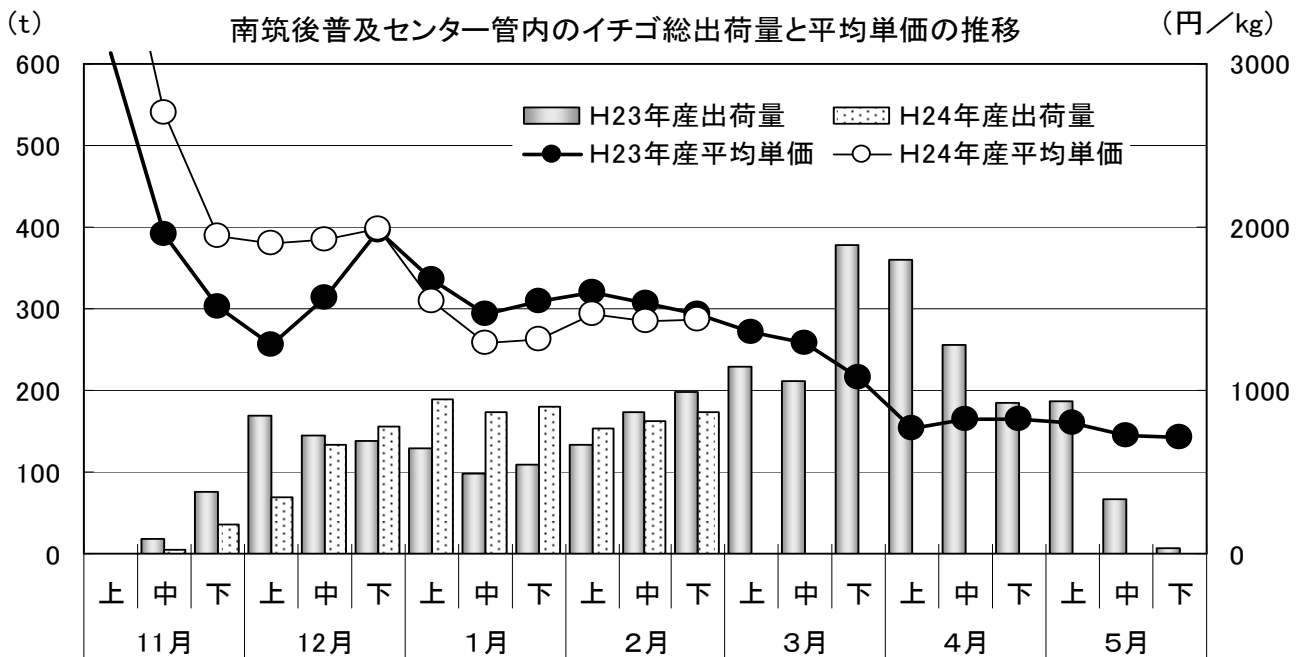
福岡大城農業協同組合

現在、2番果房の生育は、白熟～収穫終盤とバラつきが大きく、平均的な生育としては2～3果収穫となっています。3番果房は、早期作型では比較的そろいが良く着果～親指となっていますが、普通作型ではバラつきが大きく未出蕾～小指で、未出蕾が多いほ場も散見されます。これからの出荷量増加に備えて、摘果や株の整理を行いましょう。

また、株の生育は良好で、心葉の伸びが良くなっているようです。着果状況や果房の上がり具合を確認しながら、適正な草勢管理に努めてください。

病害虫については、2月上旬の高夜温と多湿で灰色かび病が急増しています。今後はうどんこ病やスリップスの飛込みが多くなりますので、病害虫対策を徹底して下さい。

《かん水・液肥》



- かん水は、少量で回数を多く行う(目安はpF値 1.7～1.8 前後)。
- かん水時期は、果実品質維持のため収穫直後に行う。
- 気温の上昇や株の生育に併せて、かん水の量や回数を増やす。
- 液肥は、窒素成分で1～2kg/10aを2～4回に分けて施用し、3月末で終了する。
- 3番果房の出蕾が遅れているほ場では、液肥施用によって急激に立ち上がる場合があるため、施用を控える。

《摘果・果梗の除去・芽の整理》

- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため、速やかに除去する。
- 芽数は4～5芽を確保し、極端に小さいわき芽は除去する。
- 3番果房以降の着果数は、着果負担や果梗の強さを考慮して3～5果/枝にする。

《温度管理》

- 日中は、サイド・谷・つま面を開放して換気を行い、低めに温度管理する。
- 夜温7℃以上が続く場合は、夜間も換気したままにする。
- 3月下旬以降は、遮光資材(塗布剤、寒冷紗など)を活用し、昼間の降温対策を図る。
- 塗布剤は、1回目は薄めに塗布し、4月以降に追加塗布する方法が望ましい。

【 3月以降の温度管理の目安 】	
昼間	低めの管理(午前:18~20℃ 午後:18℃以下)
夜間	5℃ (夜温7℃以上は開放)

《軟果対策》

- 高温期は、果実の着色が早いため収穫遅れによる「過熟果」の発生が多くなる。
- 果実品質維持のため、収穫の間隔を短縮し、収穫時の着色基準を厳守する。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は早めに低温の場所へ移す。
- 果実が葉の陰になると、黄種の原因になるため葉除けや玉だしを行う。

《電照管理》

- 草勢と気温をみながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に消灯する。
- 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合は、電照を再開する(2時間程度)。

《病害虫防除》

◎灰色カビ病

- 湿度が高いと発病しやすいため、出来るだけ換気を行う。
- 発病した葉や果実は速やかにハウス外に持ち出し、定期的に薬剤防除を行う。

◎うどんこ病

- 夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- 軟弱に生育しないように管理し、定期的な予防防除に努める。

◎スリップス類

- ハウス外からの飛込みが増えるため、発生状況をよく確認する。
- 発生した場合は、ミツバチに影響の少ない IGR 剤(幼虫にのみ効果あり)を中心に、薬剤防除を行う。

◎ハダニ類

- ハダニが発生している株は強めに摘葉し、多発した株は被害茎葉を除去する。
- 防除薬剤が葉裏まで付着するよう、薬液量を十分に使用し、丁寧に散布する。

《親株の管理 (炭そ病対策) 》

- 3月から株が動き始めるので、早めに下葉の除去を行う。
- 「炭そ病」は、株の傷口から感染する場合が多いので、下葉の除去後は防除を必ず行う。
- 予防防除は定期的散布を基本とし、手入れの後や降雨の前後にも必ず行う。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!